『敦煌寫本研究年報』第十五號（2021.03）137-158 頁

再び白堅について*

高田時雄

はじめに

筆者はかつて李盛鐸舊藏敦煌遺書が日本にもたらされた經緯に關連して、李盛鐸の第十子李滂とともに、白堅という人物について一文を草し、本誌創刊號に掲載したことがある[1]。白堅は李盛鐸舊藏敦煌遺書のみならず、多くの書蹟、古畫、拓本、古寫本[2]などを中國から舶載した人物で、日中間の文物交流史に少なからぬ役割を果たした。白堅について、筆者は前稿公刊後も引き續き注意していたため、當時には知り得なかった事實が少しく蓄積されてきた[3]。小文では、それらを纏めて書き留めておきたいと思う。

一、留學時代とその後

白堅の日本留學時代については、前稿では橋川時雄『中國文化界人物總鑑』によって早稻田大學に學んだことに觸れたのみで、詳しい事は何一つ述べることがなかった。ところが少し調べて見ると、白堅は清國留學生のあいだでも割合に目立った存在であったことが分かってきた。時は清朝最末期の 1910 年、「錦輝館の大活劇」と稱される一事件の主人公、あるいは犧牲者として登場する。『東京朝日

*小文は日本學術振興會科學研究費基盤研究（B）「中國典籍日本古寫本研究の精密化と國際的情報發信」（25244015、研究代表者：道坂昭廣）による成果の一部である。

[1]「李滂と白堅——李盛鐸舊藏敦煌寫本日本流入の背景」『敦煌寫本研究年報』創刊號、2007 年 3 月、1–26 頁；「李滂と白堅・補遺」『敦煌寫本研究年報』第二號、2008 年 3 月、185–190 頁。拙文「李滂と白堅」の中文譯「李滂與白堅」は、「補遺」、「再補」と「三補」をふくめて、《近代中國的學術與藏書》（中華書局、2018 年 4 月）の 1–67 頁に載せた。

[2]古寫本中の白眉は何と言っても唐寫本『說文解字』で、莫友芝、端方を經て完顏景賢が所藏していたものを白堅が入手し、のちそれを內藤湖南に割愛した。筆者も前稿中に觸れておいたが、その後、錢婉約「白堅其人及《唐寫本說文殘卷》流入日本考」（《中國文化研究》2013 年夏之卷、156–163 頁）が出て、關連資料が追加されている。

[3]新たな知見の一部はすでに公表したものがある。「上野本『三國志』殘卷拜觀記——白堅のこと」『中國典籍日本古寫本の研究 Newsletter』II（2015 年 7 月）、2–4 頁。

新聞』の明治43年（1910）7月5日の記事によると、同月3日、神田錦町の錦輝館で開催された中國留學生臨時特別大會には270名餘りが集まり、英佛獨からの借款によって粤漢鐵道、川漢鐵道を建設しようとする政府の方針に反對して氣焰を上げた。もともとこの大會の趣旨は革命派の主張に沿って新たに任命された汪大燮駐日公使の着任に反對しようということであったらしいが、主催責任者の于振宗は白堅等と語らい、鐵道の國有化反對さらには國會開設問題という一般論に議論を誘導しようとしたことで、參加者の怒りを買ったのである[4]。于振宗による開會の辭の後、何人かが登壇して鐵道布設には反對するものではないが、外債に賴る國有化には斷固反對とする議論を展開し、于振宗の趣旨說明に同意しなかったが、次いで白堅が登壇して汪公使の問題はしばらく措き、國會問題の議論を優先させようとしたので、參加者の猛烈な反對に遇い、擧げ句の果ては激しく毆打されて額から血を流す始末となった（[資料一]）。新聞報道によれば、この時の白堅は「早稻田大學卒業の留學生にして目下北京の新聞記者」とある。ただ北京の新聞記者云々は、現時點で確認できる資料がない。正式の社員ではなく、折に觸れてなにがしかの記事を新聞に送っていた程度のことだったのではなかろうか。

さて錦輝館では味噌を付けた白堅だが、1911年5月以降の鐵道國有化反對運動が展開する中で、四川保路同志會代表として廣東に赴いて演說し、首尾よく廣東保路同志會結成に漕ぎ着けた。そのことで革命派からも高い評價を受けることになった。革命派の新聞『民立報』は「白堅前後之血」と題する短評を載せ、錦輝館の先の出來事と對比させて白堅の勇敢な行爲を稱えている（[資料二]）[5]。その政治的立場はともあれ、白堅が一個の熱血漢であったことが窺われる。

白堅は、革命前後、おそらく錦輝館事件のあった後、運動の一環として廣東へ赴くことになった。そしてその機會を捉えて、一旦故鄉の四川に歸ったのではないかと推測される。上野家所藏で現在京都國立博物館に寄託されている吐魯番本『三國志』殘卷[6]に記された謝无量（1884–1964）の跋（乙丑春三月）に白堅の動靜についての情報がある。謝跋には「戈齋先生嗜古能書。十年前余客成都，常與之飲酒，不相見久矣。乙丑春薄游京師，偶過其齋中」とある[7]。謝无量は1910年2月から1912年夏まで成都の存古學堂の監督を務めていた[8]。跋が書かれた乙丑は1925

[4]小島淑男『留日學生の辛亥革命』（1989年8月、東京：青木書店）、138–9頁。

[5]小島淑男上揭書139頁。筆者は小島氏の書によって、『民立報』の記事に溯ることが出來たので、その原文を［資料二］として揭出する。

[6]白堅が1924年に王樹枏から重價で購入し、のち武居綾藏に讓渡したもので、武居の死後朝日新聞の上野精一に歸した。中村不折の書道博物館にある『三國志』斷簡も白堅から不折に賣却したもので、兩者はもと一つの寫本であったものが白堅により切斷されたものと見られる。

[7]注2に擧げた拙文を參照。謝跋の畫像は同處に見える。

[8]「謝无量自傳」（謝德晶整理）、『國學學刊』2009年第1輯。

年だから、その十年前というのは概數を言ったに過ぎず、謝无量が白堅としばしば酒杯を傾けたというのは彼が成都を去る1912年夏までのことで、この頃には白堅も成都に居たのである。謝无量が去ったのとほぼ時を同じくして、白堅もまた北京に居をうつし、王樹枏の門下にあった筈である。

白堅は數年のちに再び日本の新聞に登場する（[資料三]）。辛亥革命ののち、孫文等國民黨による第二革命が挫折し、1913年10月、袁世凱が正式に大總統に就任した。それを受けて東京の公使館では盛大な祝賀行事が行われた。公使館の構内には數百の燈籠や提燈が麗々しく飾り付けられ、正裝した館員が引きも切らぬ朝野客人の應接に忙殺されていた。日が暮れると、樹々にしつらえた提燈に燈がともされ、祝宴は一層の盛り上がりを見せた。一方、梁啓超率いる進歩黨は新たに成立した袁世凱政權の與黨だったので、神田錦町にあった進歩黨東京支部でも祝賀式典が擧行され、支部長の白堅が司會を務めたことが記事に見えている。この時點で白堅は再度日本に居り、進歩黨員として積極的な活動を行っていたことがわかる。革命前に立憲派であった白堅が梁啓超の進歩黨に所屬するというのは、その政治的傾向からみて决して奇異ではない。

やや後のことになるが、白堅のいわば政治好きの性行を語るエピソードとして附言すべきことがある。第一次大戰後、1920年11月から翌年2月までワシントン會議が開催された。この會議には極東及び太平洋地域に權益を有するアメリカ、イギリス、フランス、イタリア、日本、ベルギー、オランダ、ポルトガル、中華民國の九ヶ國が參加し、軍縮問題と太平洋地域の平和問題が討議された。中國は北京政府によって代表されていたが、當時の中國は南方には國民黨の廣東政府が存在するほか、各地に軍閥が勢力を保持し、一種の分裂狀態にあった。また國會も名前だけで全く機能していない。したがって中央政府の威令の及ぶ範圍には限界があり、對外的に一致して國家の主張を展開できないという弱みは歴然たる事實であった。會議出席の衝に當たる外交部では、分裂の現狀を彌縫して、表面的にも統一を打ち出すための幾つかの工夫が必要であった。そのための一つの方策として取り上げられたのが、在外公使や地方からの意見徵集という方式であったが、更に範圍を擴大し國内各界からも意見を求めることで、形だけでも統一した國論を演出しようとした。このような情勢下にあって白堅は自らの意見書を内務部に提出していたということが知られる。白堅は各省區議會、軍人、教育會、商會によって構成される國民外交大會を北京で開催せよと主張したのである。しかし内務部から外交部に移送された白堅の意見は、外交部ではすでに太平洋會議籌備處

を設置して對處していることを理由に採用されなかった[9]。

1920年、おそらくは上記の意見書を提出した後であろうと思われるが、白堅は日本に來たり、かつて日本語を教わった市河三陽を訪問した。市河三陽は市河寛齋の曾孫、市河米庵の孫にあたる。先祖の業績顯彰に努めるとともに書法を教授して暮らしていた[10]。多病の質で、前年には秋冬のころに長く寢込んでいたところ、年が改まった1921年正月、白堅が年賀をかねて病氣見舞いにやってきたのである。白堅はみやげに倪文正[11]眞蹟と宋搨十七帖を送り、かつての師の心を勵ました（[資料四]）。この事實によって、我々は白堅の學歴について新しい知識を得ることが出來る。市河三陽は「白堅はむかし予が教へたるものなり」としか言っていないが、これは日本語を教わったものであるに違いない。1906年秋に東京へやって來た周作人は初め留學生會館の補修班で日本語を學んでいたが、やがて法政大學の豫科に入學した。當時の日本語の教師が市河三陽であり、周作人はその人となりに親近感を覺えたらしく、後にその訃を傳え聞いて「市河先生」なる一文を書いている[12]。市河三陽が法政大學豫科で教えた期間は決して長くなく[13]、おそらく白堅も周作人と同時期に法政の豫科に在籍していたのであろう。ひょっとすると同じ教室に机を竝べていた可能性もある。いずれにせよ白堅の早稻田入學は法政の豫科を終えてからのことになる。

二、石經と蘇東坡

白堅はこれといった官途に就くことなく、中國國內で入手した古寫本や書畫、碑刻、拓本などを、主として日本の愛好家に賣り捌くことで生計を立てていたもの

[9]この事實については、川島眞『中國近代外交の形成』、2004年2月、名古屋大學出版會、493頁を參照。意見書の原件は臺灣中央研究院近代史研究所所藏の外交部檔案に見えるとされるが、筆者は未見。

[10]市河三陽（1879–1927）は市河萬庵の嫡子で、明治31年（1898）第一高等學校文科に入學しているが、病氣のため途中退學、日露戰爭には通譯として從軍したという。遲くとも大正二年（1913）頃には自宅を兼ねた「心畫室」で書法を教授し、また樂墨會を經營して書道雜誌『墨海』を刊行するとともに、幾つかの自著もここから出版した。

[11]倪元璐（1594–1644）。明末の戸部尚書兼翰林院學士、李自成の大順軍が北京を陷れた日に自ら縊り殉節した。書法に勝れ、とりわけ行草を善くした。

[12]民國廿四年（1935）執筆、『苦竹雜記』（1936年2月、上海：良友圖書印刷公司刊）に收められた（245–250頁）。松枝茂夫の日本語譯があり、『周作人隨筆集』（1938年6月、東京：改造社刊）に收錄されている（75–80頁）。

[13]法政大學大學史資料委員會編『法政大學史資料集』第十四集（1991年3月）によると、明治四十一年度（1908）在籍講師列名の中に「市河三陽」の名が見える（60頁）。周作人ははっきりと市河先生に習った年を言わないが、たぶん1907年のことでなかったか。資料がすでに亡失しているのであろう、『資料集』に講師列名が記錄されているのは明治四十一年（1908）のみである。市河三陽が法政豫科で講師を勤めたのはせいぜい1907、1908年の二年くらいだったろうと推測する。

らしい。これは前稿でもすでに幾つかの例を擧げておいた。ただ高値で賣れれば何でもよいということではなかったらしく、その邊りが一般の骨董商とは一線を劃している。彼が取り扱った「商品」の中で、おそらく白堅自身が專門領域として自負していたのは石經と蘇東坡の書畫だったように思われる。なかでも石經はその蒐集と研究に相當な精力を費やした。上海の書齋を「漢石經石室」と名付け、また自分の名「堅」を書くのに、しばしば熹平石經の字體「絊」を用いる[14]などは、石經への拘りを如實に示すものである。以下に幾つか白堅と石經の關わりについて述べよう。

關西大學の內藤文庫にある白堅の湖南宛書簡に以下のように見えている[15]。

> 恭仁之山、秋色淸美、伏惟
> 起居佳勝
> 著述日新。七月下旬奉寄之方彝拓本、計達淸覽。此器羅雪堂定爲矢彝、有釋文編入其遼居集中矣。中有眾里君一語、謂與史頌敦之里君、卽周書酒誥中之里居、書作居者字之譌也、此一字所關甚大云。往嘗奉
> 覽有熹平石經殘石拓本、此石曩爲陶北溟其人所有、求其拓本終不肯以與人、蓋矜惜之至也。今此石悉數歸堅、昨已輦致上海、今已氈蠟從事、拓成卽寄，此石有詩易公羊儀禮計三百餘字，有關訓詁之處獨多，往者黃小松得蓬萊閣諸本已自矜異、今地不愛寶、千八百餘年之後、豁焉呈露中郎出而虎賁失色矣。書以告幸炳卿吾師史席 白堅頓首 十月三日

石經についての言及は、熹平石經拓本の原石は陶祖光（北溟）の所有であったが、今度すべて自分のものとなり、それが上海に着いたばかりで、いま拓本を作っているところなので、出來上がったらお送りする、というのである。この書簡の十月三日がはたして何年のものかは、上海發の消印が「3.10.2X.17」となっていて年を示す 2 の次の數字が滲んでいてよく讀めない。しかるに白堅の『漢石經殘石集』をみると、冒頭に「今歲秋八月余游夷門武進陶君祖光以所藏漢熹平石經殘石十二見遺」とあり、また文末に「十八年歲次己巳十二月歲除日西充白堅識于上海桃源邨之漢石經石室」と記しているから[16]、白堅が石經原石を陶祖光（字北溟、1882–1956）から入手したのは、民國 18 年（1929）8 月ということになる。したがって湖南宛の白堅書簡消印の讀めない數字も 9 であって、これが 1929 年 10 月 3 日付けの書簡であると認定できる。

[14]『魏正始三體石經五碑殘石記』（丙子新秋、1936 年 9 月?）に自署した外題がこの文字を用いているのと、石經拓本に「絊」一字朱文印を鈐したものがある。
[15]關西大學內藤文庫、湖南宛書簡 8435 號。
[16]白堅『漢石經殘石集』、（民國）十九年（1930）排印本。

白堅は熹平石經の拓本、次いで原石を中村不折に賣却している。この點については前稿でも觸れておいたが[17]、いま中村不折自身の口からその事實を確認しておこうと思う。不折は 1937 年 7 月發表の「漢の熹平石經」で「四、五年前、本當の石の破片が河南省洛陽の漢時の大學の舊趾から發見され、その蒐集家の白堅といふ人が造った拓本十五枚をもって來たものがあって、しかも價は三十二圓でよいと云ふから早速買取った」といい、また原石についても、紆餘曲折を經て種々交渉を行った結果「その十三枚の破片は終に僕の所有に歸し」たと喜びを書き記している（[資料五]）。翌 1938 年 12 月の『大日』に載せた「石經の話」にもほぼ同じ經過を述べてある（[資料六]）。ただ十三枚の石經破片が「陽光から白堅に贈られ」たとしているのは、上掲白堅の湖南宛書簡に見えるように陶祖光からでなければならず、不折の聞き間違いであろう。いずれにせよ中村不折が熹平石經の拓本と原石をともに白堅から入手した經緯がよくわかる。白堅が石經を入手したのは 1929 年、そこから作った拓本はやがて內藤湖南にも送って寄越したと思われるが、それ以外にも何セットかが寄贈あるいは賣却用に作成された[18]。不折が三十二圓という廉價で購入できたのも、原石があって幾らでも拓本を作れたからである。白堅はまた入手の翌年それらを『漢石經殘石集』として影印出版し、解說を附した[19]。ただ不折が原石を入手するのにはかなりの時間がかかったと見えて、それはようやく 1942 年に實現した[20]。

ところで中村不折が『大日』に揭載した「石經の話」の中に「之が石經拓本の我が國に傳來した嚆矢である」と一文があるのを見て、彼の南方熊楠が「石經拓本が本邦に渡りし嚆矢という中村氏の說を疑う」といい、自身が明治十五年（1882）に高野山の寶物展覽會で「漢の蔡邕筆の石經の拓本と札付きたる大幅一枚あった」という目擊談[21]を披露しているのは頗る興味を引く事柄だが、いま本題から逸脫するので觸れない。

歌人として名のある會津八一（1881–1956）はまた書家としても知られ、早稻田大學で美術史を講じる學者でもあった。この人に「拓本の話」という一文があって[22]、そこに魏の三體石經の拓本を賣りに來た支那人のことに言及している（[資料

[17]注 1 の「李滂と白堅」、11 頁、注 39。

[18]京都大學人文科學研究所には『漢熹平石經殘字』と題する拓本集が二種（民國二十四年、二十五年）所藏されているが、白堅が當時の東方文化學院京都研究所に寄贈したものと思われる。

[19]民國十九年（1930）西充白氏景排印本。

[20]『臺東區立書道博物館圖錄』、2000 年 4 月、4 頁。

[21]昭和 14 年（1939）3 月 10 日南方熊楠致水原堯榮書簡、『南方熊楠全集』第 9 卷、1973 年 3 月、東京：平凡社刋、407–8 頁。

[22]文末に、昭和四年（1929）一月二十三日談話とある。

七]）[23]。白堅とは書いていないが、他に適當な人物が思い當たらない。筆者は必ずや白堅のことと推測する。これは昭和四年の談話記錄で、二三年前と言っているから、昭和のはじめのことであったらしい。白堅は漢の熹平石經以外にも魏の正始三體石經を所藏しており、第三石と第五石の二石をやはり中村不折に讓渡している。三體石經は民國十一年に洛陽の郊外から出土したものを最多とする。白堅は殘石を二個所藏していた。1936 年に刋行された白堅の『魏正始三體石經五碑殘石記』は自身の所藏を含め彼が目睹し得た殘石五個について記錄した書物だが、それに據れば第一石は洛陽博物館、第二石は出土の翌日二つに斷裂し、洛陽博物館と張鈁（1886–1966）家に分藏され、第三石は中村不折、第四石は歸處不明、第五石は西充白氏與石居に存すると言っている。したがって白堅の言を信ずれば、第三石が先ず 1930 年以前に不折の手に渡ったもので、第五石はその後の讓渡ということになる。ちなみに歸處不明とされた第四石は京都の藤井善助氏の有鄰館に歸した[24]。ただ白堅が入手した三體石經殘石はこの二個だけではなかったらしい。というのは『殘石記』によると「今年（1930）春三月洛陽漢太學之故墟龍虎澗北岸土人袁致和掘井地下五尺許得三體論語子曰甯武子至於乞諸其鄰存三十許字此亦三體石經也……此一片石今存與石居」とあり、また白堅「獲正始三體石經尙書第廿一春秋第八殘石記」[25]には、「歲在丙子十一月四日之夕、游於日本大阪淺野竹石山房、得正始三體石經殘石二斤（片）」とあって、大阪の古美術商竹石山房淺野梅吉から二片の殘石を得たことを記している。『殘石記』の印行に遲れること僅かに數月である。やや意外なのは、白堅がこれを日本で購入していることである。白堅は基本的に中國で文物を入手し、それを日本で賣却するというのが例であり、日本での購入というのは寡聞にしてこの一例しか知らない。白堅の石經に對する强い拘りを示すものと言えよう。ちなみに現在これらの殘石の行方は不明である[26]。

---

[23]熹平石經の拓本と同じく、白堅は三體石經の拓本も日本に持ち込んだ。京都大學人文科學研究所に西充白氏拓本『魏正始石經殘字』一册があり、また兼田信一郎氏によれば、細川氏永靑文庫に白堅の印記を有する三體石經拓本があるらしい。同氏「白堅と岡部長景――ある中國人と華族政治家の「石鼓文」拓本をめぐる交流の背景」、獨協大學國際教養學部『マテシス・ウニウェルサリス』第 13 卷第 2 號、2012 年 3 月、86 頁。兼田氏のこの論考は、自身の入手になる石鼓文拓本が、もと白堅が岡部長景に贈呈したものであったことをきっかけに兩者の關係を論じたものだが、白堅の日本人との交際がすこぶる多方面に涉っていたことを證する材料の一である。

[24]藤原楚水「三國時代の書道（二）」『書苑』第四卷第三號、昭和 15 年 3 月、58 頁。

[25]『支那學』第 9 卷第 1 號、1937 年 7 月。

[26]その拓影と思われるものが内藤文庫に殘されている。内藤文庫 6-284。拓影には他の石經拓本にも見える「白堅之印」が押されている。拓本を作った靑山淸の識語は二枚とも「魏三體石經殘石、西充白堅先生珍藏、丙子十一月上澣 靑山淸手拓」で、「靑山淸印」（白文）と「東觀書屋」（朱文）の二印が鈐してある。「丙子十一月上澣」の語からも、白堅が竹石山房から購入して間もない頃の拓本であることが分かる。小さな殘石とはいえ、現在所在不明であることを勘案すると、貴重すべき拓片である。

石經とならんで蘇東坡の繪畫や墨蹟も白堅が好んで收集した對象であった。前稿でも、その晩年に蘇東坡「瀟湘竹石圖」を 5,000 元で鄧拓に賣却したこと[27]、別に「枯木怪石圖」（中國では「木石圖」とも稱される）を所藏していたが、早く日本に賣却してしまったことに觸れておいた。しかるに後者の「枯木怪石圖」が 2018 年 11 月 26 日、香港で開催されたクリスティーズ（佳士得）のオークションに出現し[28]、4.636 億香港ドルという中國古典繪畫として史上最高値で落札されたというニュースが話題となった。この畫はもと方雨樓という業者が山東の濟寧で入手したもので、それを白堅が買い取り、大阪の收藏家阿部房之助に轉賣したということである。その折に古書畫鑑定家の張珩が白堅に讓渡交渉をしたが、價格で折り合わず結果阿部の手に歸したという顚末を張珩自身が記している[29]。

昭和 5 年（1930）11 月 27 日、樂群社の第三回雅會が洛北鹿ヶ谷の詩仙堂で催された。樂群社とは同年の三月に長尾雨山、狩野直喜、小川琢治といった面々が內藤湖南の隱居所恭仁山莊を訪れたのをきっかけに定期的に賦詩の集まりを持とうということになったもので、第二回は 6 月 2 日に京都市內南禪寺町の細川家別邸怡園で開催された。今回が第三回の集まりである。白堅はその時偶然京都に居合わせたので、狩野が提案して白堅も呼ばれたのである[30]。雅會に參加した白堅はこの時攜えてきた蘇東坡の「潁州禱雨詩話」を四翁はじめ同席者に披露した。これは當日出席していた松浦嘉三郎の「書四翁樂群圖後」に「偶有蜀人白君堅甫携坡公禱雨記事詞卷而來」とあることによって知られるのだが[31]、また內藤文庫に遺される白堅の湖南宛書簡中にどういうわけか白堅が長安莊江藤濤雄に宛てた以下のメモが封入されていることからも裏づけられる[32]。

東坡禱雨詩話今將其尾寫眞二枚與實物同大其末一印尤爲自來講東坡書者所未

[27]白堅晩年については、前稿では資料的制約のために、詳しく述べることが出來なかった。しかるに數年前に出た宋希於「關於白堅晩年情況的補充」（《南方都市報》2018 年 6 月 17 日）の一文は、《南充地區書畫名人錄》（四川省南充地區文化局編印、1987 年 8 月刊）に白隆平（白堅）の項目があり、建國後の動靜を傳えることを述べ、また中國のネットオークションに出品された白隆平が「蘇子膽爲孫莘老竹石畫卷」を北京の和平畫店に伍仟圓で賣却した際の收據（日付は 1961 年 5 月 29 日、住所は重慶龍門浩上一天門 55 號）の存在を紹介しており、陶拓への賣却に和平畫店が仲介していたことを知り得る。さらに 1950 年代初期に、日本特務間諜として搜査對象であったことを示す材料にも言及がある。興味のある讀者は是非就いて見られたい。

[28]https://www.christies.com/auctions/sushi?lid=4&sc_lang=zh-cn&cid=em_dis_aod_slp_pmp_cpt_17461__find_precihead_sc_ch

[29]張珩『木雁齊書畫鑒賞筆記・繪畫一』、文物出版社、2000 年 12 月、70 頁。

[30]『君山詩艸』、昭和庚子（1960）八月刊、その第 12 葉：「庚午晩秋樂群社友會於一乘寺村之詩仙堂。時民國白山夫堅以事在洛、亦修簡招之。句中遠客卽指山夫。」詩稿は關西大學の內藤文庫に殘っているが、同文である。彩色圖版が錢婉約・陶德民編著『內藤湖南漢時酬唱墨迹輯釋』（北京：國家圖書館出版社，2016 年 9 月）の 144 頁に見える。

[31]拙文「李滂と白堅（補遺）」186–187 頁を參照。

[32]內藤文庫湖南宛書簡、鹿角 9-107-2。

曾見過奉覽必有感也。

白堅上

江藤濤雄殿　　十一月三日

日付は11月3日で少し早いが、江藤長安莊に出すつもりで手元に置いていたものを、寫眞とともに湖南に送ったものであろうか。湖南宛の用箋と長安莊宛の用箋は全く同じもので、白堅が旅行中に携帯していた便箋を用いたものと思われる。詩仙堂で東坡の書蹟を披露した折に、湖南から、もし寫眞があればと求められたものと推測する。その湖南宛の手紙は次の通り[33]。

前月廿七日得陪
清宴竟日欣幸何可言喩、生平未曾作詩而君山先生有詩、不可以不和、爰不自
揣其陋敬步其均、坿上藉乞
教正、臨穎祇益皇恐耳。明日歸上海、初冬漸寒伏惟
珍攝。　　白堅頓首上
湖南先生史席　　十二月二日

白堅は雅會の當日詩を作るに及ばす、數日の推敲のすえ遲ればせながら湖南に送り屆けたことがわかる[34]。

白堅はまた歸國後、翌年の一月、この東坡の書蹟をコロタイプに印刷して湖南に送り屆けた。コロタイプと共に封入された書簡には次のようにある[35]。

新歲敬惟誕膺多茀、疇昔詩仙堂得陪清宴、今猶神往。東坡潁州禱雨詩話墨蹟,
茲以珂羅版印出，奉上一部，試與寒食帖對勘尤妙、寒食帖坡翁四十七歲時書、
此則其五十六歲時書也。　　白堅頓首上
一月七日
炳卿先生史席

ここに言及されている寒食帖はやはり東坡の墨蹟として著名なものである。もと圓明園にあったものが、第二次鴉片戰爭の際に民間に流出、1917年北京に書畫展覽會に出品されたこともあるが、のち日本に渡り1922年惺堂菊池晉二（1867–1935）の收藏に歸した。關東大震災の折、火の燃えさかる中惺堂が萬死を犯して救い出したというので、一時佳話として喧傳された。震災後半年餘のあいだ内藤湖南に寄託され、湖南は日夕賞翫に耽ったという經緯がある。白堅はそんなことも聞き

[33]同上。京都の旅宿柊屋旅館から出されている。
[34]内藤文庫所藏の白堅詩稿も圖版として上掲『內藤湖南漢時酬唱墨迹輯釋』の150頁に見える。
[35]内藤文庫10書畫145「東坡潁州禱雨詩話墨蹟」に附屬。

知っていたのであろう。第二次大戰後故宮博物院の購得するところとなり、現在臺北故宮に收藏されている。

ところで樂群社の雜務は當初からずっと青山清が受け持っていた。內藤文庫中に見える青山の湖南宛書簡は多くがこの關係のもので占められている。青山清は浣華と號する書家で長尾雨山、內藤湖南に私淑、當時東方文化學院京都研究所の司書室雇員であった。第一回、第二回は當然彼がすべてを取り仕切ったのだが、第三回は止むを得ざる事情があったものと見えて、松浦嘉三郎が替わって世話人を擔當したのである。松浦がその連絡のために湖南に宛てた次の書簡がある[36]。

> 拜啓、樂群社詩仙堂に於ける聚會ハ來ル二十七日（木曜）午前十時頃より開き度く此次ハ小川先生の當番にて小生が青山君に代りて世話人を致すことと相成り居候。若し當日御差支有之候節ハ御一報を賜はり度不取敢右御案內申上候。早々不一。　　嘉三郎頓首　十一月十九日炳卿夫子大人侍史

松浦嘉三郎は湖南の學生で、當時東方文化學院京都研究所研究員であった。湖南逝去の昭和 9 年（1934）の 9 月、研究所を辭して滿州に渡った[37]。

白堅は今回の日本滯在から歸國してのち、日を置かずこの書蹟を影印し攷證を附して出版した[38]。同書の末尾に「十九年歲次庚午十二月白堅讀過漫錄識之」と記しているが、農曆の十二月はすでに 1931 年の 1 月になっている。日本では適當な買い手が見當たらず、更なる宣傳を兼ねてこの書を刊行したものであろう。ただその後この書蹟がどこに收まったかは知られていない。

以上、白堅が特別な拘りを持っていたと思われる石經と東坡という二つの商品グループについて若干の補足を行った。氣骨のある骨董商であれば自分の商品にそれぞれ專門があるのは當然であろうが、白堅の場合はその傾向が一層强いように思われる。彼は決してよろず屋ではなかった。

三、日中往還

白堅は主たる買い手が日本人であったために、ほとんど毎年のように日中の間を往復した。上海と長崎を結ぶ日本郵船の日華連絡船として長崎丸と上海丸が大正 12 年（1923）から就航し、翌年からは神戸が起點となり利便性を增した。神戸

[36]內藤文庫中の湖南宛書簡 1441 號。

[37]松浦については『陶湘叢書購入關連資料』（京都大學人文科學研究所附屬東アジア人文情報學研究センター「東方學資料叢刊」第 17 冊、2010 年 3 月）の「松浦嘉三郎について」（12–18 頁）を參照。

[38]『景眞本東坡潁州禱雨詩話 坿攷證』一冊。國內には內藤文庫にしか所藏がないようだ。L21**2*591

を午前11時に出港すると、翌日の午前9時に長崎着、長崎に停泊すること4時間で、午後1時に出港、次ぎの日の午後3時には上海に着いたという[39]。上海神戸間を二晝夜で往來が出來た。白堅も普通はこの船を利用したのである[40]。

書畫骨董の賣り込みは白堅の本職であるから、傳てを辿って買ってくれそうなところに商品を持ち込むのはよくあることだったに違いない。東京美術學校の校長であった正木直彦の日記『十三松堂日記』の昭和10年（1935）の條に白堅が見えている[41]。

> 八月十日　雨　白賢（堅）氏上海より來りて訪問す。名畫數點を攜來せりといふ。明日往觀を約す。
>
> 八月二十一日　雨　午前十一時帝國ホテルに白賢（堅）を訪ひ將來の繪畫を觀る。
>
> 　一、耕織圖二卷　　一、貫休羅漢圖
>
> 耕織圖は南宋紹興の時（原文數字空白）の作る所。本卷に紹興の印あり。又卷尾に畫中に松年筆の三字の落款あり。宋末元初に程棨摸寫し各圖に篆書の題詩を物せしともいふ。乾隆帝は斷じて紹興印も僞印、松年筆も僞筆にして、程棨の書きたるものなりとせり。余も此說に左袒せざるを得す。畫は南宋初期のものとは見えず。劉松年の筆意にもあらず。然らば程棨といふこと的確なり。跋文中に姚式は明に之を云へり。午後號外出てて昨曉京阪地方大に出水被害多きよしを報ぜり。

白賢と書かれているが、もちろん白堅その人であるに違いない。正木の評價は嚴しく、おそらく購入は見合わせたであろう。

ところで白堅は日本と中國のあいだを頻繁に往來し、様々な人物に接觸している。何も直接に商品の賣り込みを目的とせずとも、色々な人との交流の中で新たな顧客を得ることもあれば、然るべき地位にある人物に刺を通じておくことは重要な仕事であったに違いない。ところが商賣とは直接の關係が全くない、いわば偶然の出會いのような場において、白堅の横顔を捉えた記錄がのこっている。

淺井竹五郎（1890–1980）という人は、大阪生まれで、名古屋を據點とする陶磁器輸出會社を經營、世界中に日本製陶磁器を輸出、戰前には取扱い高日本一を記錄したこともある有能な經營者であったが、一方で芳野町人の筆名で多くの隨筆

[39]岡林隆敏編著『上海航路の時代——大正・昭和初期の長崎と上海』、長崎：長崎文獻社、2006年10月

[40]ちなみに白堅は日本から上海に歸るのに、1926年7月には上海丸、1934年1月には長崎丸に乘船している。

[41]『十三松堂日記』第三卷、東京：中央公論美術出版、1966年。

を書いた[42]。その隨筆集『呂宋の壺』に、白堅との出會いを描いた箇所がある。しかもその描寫は極めて印象的で、なるほどこういう人物であったかと納得させられる。おそらく白堅という人物のナマの風貌を窺う上では第一等の材料と思われるので、これを［資料八］として文末に附載しておいた。

時は大正 15 年（1926）の夏である。長崎出港の上海丸の船上で「老子」を讀んでいた時、白堅から話しかけられたのをきっかけに、ことばを交わしたのだが、骨董商を自稱する「白リンネルの背廣を着た四十前後の端然たる白皙長身の美丈夫」は、なかなか流暢な日本語を用いる。骨董商という觸れ込みだが、明朝で「白堅」とのみ印刷した簡素な名刺や、「あまりにも端麗」な風貌、學問の深さを示しつつ、淺井の質問をうまくはぐらかす話しぶりに、淺井は半信半疑で疑惑の目を向けるのである。さらに數日後の蘇州、これから招待の宴席に出向く車を待ってホテルのロビーに居たところ、またしても白堅に出くわした。今度も「柔和な物腰の人であるが、何となくただの商人でなくて、軍閥の影に活動する游偵といふやうな感じのする人」という印象を深くする。白堅には、ただの商人ではないという雰圍氣が否定しがたくあったらしい。若い時分から政治好きであった白堅は、なにがしか實際にそういう役割を演じていた可能性も否定は出來ないように思えるが、確證はない。資料には引かなかったが、淺井氏は日本に歸ったあと新聞の支那電報欄を讀んでいて、吳佩孚の幕僚中に白堅武という武將の名を見付け「あの晩の北京の骨董商人白堅氏が、何だか現在の歴史をつくってゐる重要な立役者の一人であった樣な氣がしてならぬ」という感慨をもらしている。

1932 年 3 月 1 日、滿州國が成立し、鄭孝胥が國務院總理に就任した。白堅は首都の置かれた長春にまで出向き、しばしば鄭孝胥に面會している。いま『鄭孝胥日記』[43]から白堅の名が現れる箇所を摘錄してみよう。括弧內は陽曆である。

民國二十二年（**1933**）

一月初九日（2 月 3 日） 白堅來訪，未晤。

十七日（2 月 11 日） 白堅來，求題東坡所作《張龍公詩話》卷子。

二十六日 （2 月 20 日）白堅甫來言，可聘內藤虎爲講官，彼願爲使。

十一月十二日（12 月 28 日） 白堅來，求預（憲法）籌備委員。

十四日（12 月 30 日） 白堅甫來。

[42]淺井竹五郎の人物について、簡單には加藤唐九郎編『原色陶器大辭典』（京都：淡交社、1972 年 10 月）に掲載の項目「淺井竹五郎」（16 頁）を參照。また杉浦澄子「亡き父 淺井竹五郎」（『陶說』329 號、1980 年 8 月、75–79 頁）は令孃による回想記である。

[43]中國歷史博物館編、勞祖德整理、1993 年 10 月、北京：中華書局刊（中國近代人物日記叢書）、第 5 册。

十七日（1 月 2 日） 寶瑞臣來，言白堅事；余謂，可語孔世培，令國道局延充翻譯。

十八日（1 月 3 日） 白堅來。

十二月朔（1 月 15 日） 白堅來，言西山許薦入美術院，且言將赴西京一游。

民國二十三年・康德元年（1934）

正月初六日（2 月 16 日） 白堅來。..... 白堅言，王病山夫婦及吳震浦因吸煙拘入捕房，甘漢臣救之，罰四百餘元乃免；後旬餘，而病山卒。

二月初四日（3 月 18 日） 白堅偕後藤武來訪。

四月初九日（5 月 21 日） 白堅來。

五月初九日（6 月 20 日） 彭、程、徐、白、許來。

十三日（6 月 24 日） 陳傑、白堅、程志超、關文瑛、劉爽、孫常敘來。

廿一日（7 月 2 日） 彭、程、白來。

六月十六日（7 月 27 日） 白堅來。

七月初八日（8 月 17 日） 白堅、林鶴皋來。

十八日（8 月 27 日） 白堅來。

廿二日（8 月 31 日） 劉循、白堅、劉爽來。

廿四日（9 月 2 日） 彭、程、白、于來。

廿五日（9 月 3 日） 白堅來。

八月初六日（9 月 14 日） 白堅及和田、加地二和尚來。

十一日（9 月 19 日） 白堅、後藤武來。

九月初二日（10 月 9 日） 後藤武、白堅來。

十一日（10 月 18 日） 白堅及松浦嘉三郎來，東方文化學院研究員。松浦從狩野君山學《三禮》，與內藤、長尾、福田善，嘗在北京《順天時報》，能華語，狩野薦之于文教部，將與以囑託。

廿四日（10 月 31 日）白堅來。

廿七日（11 月 3 日） 白堅來。

十月初二日（11 月 8 日） 白堅、後藤武來。

初八日（11 月 14 日） 白堅來。

十一日（11 月 17 日） 白堅、後藤武來。

十五日（11 月 22 日） 白堅來。

十九日（11 月 25 日） 白堅、傅汝恆、志琮、陳傑俊超來。

三十日（12 月 6 日） 白堅來。

十一月初三日（12 月 9 日） 白堅、松浦來。

民國二十六年・康德四年（**1937**）

十月十一日（11 月 13 日） 白堅來，示東坡與孫莘老竹石畫卷，屬爲題簽。

十月十九日（11 月 21 日） 白堅、森安三郎來，森出《濟眾亭記》問用筆之法。

十月廿四日（11 月 26 日） 盛格、白堅來。

1933 年は 2 月 3 日から 2 月 20 日、その後は年末まで見えないが、12 月 28 日から翌 1934 年の 1 月 15 日まで白堅の名が見える。白堅はその後日本に向かい、1 月 21 日の長崎丸で上海に歸った[44]。1934 年は非常に頻繁に長春に來ていたらしく、2 月 16 日から 3 月 18 日まで、5 月 21 日、6 月 20 日から 7 月 2 日、7 月 27 日、8 月 17 日から 9 月 3 日、9 月 14 日から 19 日、10 月 9 日から 18 日、10 月 31 日、11 月 8 日、12 月 6 日から 12 月 9 日まで、ひょっとするとこの年の後半はずっと長春に滯在していたのかと思わせるほどである。その後は三年近く間が空いている。多くの場合、「白堅來」とあるのみで、用件は知られないが、少なくとも書畫の題簽を求めるのは一つの目的であったらしい。《張龍公詩話》というのは、上に觸れた「潁州禱雨詩話」のことである。樂群社の集いから二年半ほど經つが、卷子はまだ白堅の手元にあった。また「坡與孫莘老竹石畫卷」も晩年まで手元に置いていた「瀟湘竹石圖」のことで、ともに白堅の愛惜してやまない東坡の作品である。

やや注目すべき事としては、內藤虎すなわち內藤湖南を（滿州國の）講官として招聘することを提案し、また自らも憲法籌備委員になることを求めている。このあたり白堅の面目躍如たるものがあるが、ともに實現せずに止んだ。樂群社のところで觸れた松浦嘉三郎の名も見えている。松浦は大同學院教授となる豫定で、着任するまでのあいだ文教部の囑託していたが、これは鄭孝胥の計らいであったことが分かる。白堅が 1934 年後半の半年のあいだ長春でなにをしていたのか氣になるが、鄭孝胥の日記からは窺い知ることを得ない。

四、東華門外の邸宅

白堅は北京の東華門外南池子に邸宅を構え、しばしばここに日本からの賓客を迎えた。名付けて「與石居」という[45]。白堅は北京以外に上海にも住まいをもって

[44]拙文「李滂と白堅」、13 頁。

[45]自著『讀正氣歌圖史集』（1939 年）の序末に「西充白堅識於北京東華門外之與石居」とある。ただ「與石居」はもと上海の住居であったらしく、1938 年『支那學』第 9 卷第 2 號に載せた「徐子之官鐶攷」末に「歲在丁丑（1937）七月八日西充白堅識於上海徐家匯樹德坊之與石居」と言っている。

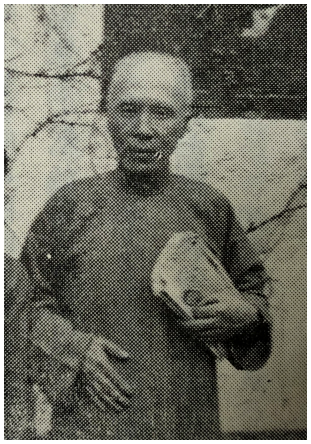
いた。上掲 1929 年 10 月の內藤湖南に宛てた書簡は上海から出されているが、その住所はフランス租界のラファイエット路にあった桃源邨十號となっている[46]。ここが白堅の「漢石經石室」の所在地である。上海租界は商品の仕入れや關係方面への連絡にも都合が良かったと思われ、何よりも日本との往來に便利であった。しかし淺井竹五郎との會話にも「北京へ歸る」という言い方がされているところを見ると、本宅は北京にあったと考えねばならない。その地點は東華門外といい、また南池子ともいう。南池子大街は南北方向の街路で、北は東華門大街から南は東長安街に及ぶ街路だから、東華門大街と南池子大街が交差するあたりにあったものであろう。この一帶は清朝の時代には皇城の內側であり、皇族にしか居住が許されなかったが、民國になってようやく平民の居住がはじまったという。現在では「歷史文化保護區」に指定されている。

ある年の一日、後藤朝太郎（1881–1945）は、白堅、楊歡谷、中根齋、岩村成允、高橋亨と連れ立って、邵嵩年の家を訪れたが、終わって當時北京訪問中であった三上參次（1865–1939）の宿を表敬訪問し、さらに三上も一緒に白堅の邸へ行くことになった。その時の様子が後藤の著書に描かれている（［資料九］）。後藤はそれより少し前に行われた三上老大人招待讌席についても觸れているが、「當夜は日本の歷史の大家三上先生を嘉賓に北京大學の朱希祖翁や張鳳擧君、それに瀨川翁や濱田君、原田君、山口君始め大村、日野水、酒井の三井の主人公側の諸君、中々に史家を中心としての盛宴であった」[47]と、當日の宴席出席者の顏ぶれを擧げている。そのうち濱田君、原田君というのは、京都大學の濱田耕作（1881–1938）、東京大學の原田淑人（1885–1974）であるに違いなく、とすれば彼等は日中間で東方考古學協會の發足を協議するために北京に來ていたのであり、それは大正十五年（1926）六月のこととなる[48]。

［資料九］の拔萃部分から見ると、白堅の邸宅はなかなか瀟洒なしつらえであったことが窺えるが、我々にはこの時客人たちに披露した所藏品の數々のほうが目を引く。「三國志の原文」とあるのは、紛れもなく 1924 年に王樹枏から購入した[49]吐魯番出土の古寫本の筈で、1926 年の時點ではまだ武居綾藏や中村不折の手には渡っていない。おそらくまだ切斷されてもいなかった筈である。三國志以外にも、吐魯番文書や敦煌經卷を所藏していたことも分かる。

[46]封筒裏に「上海法租界辣斐德路桃源邨十」とある。辣斐德路は佛文 Route Lafayette。
[47]後藤朝太郎『支那風俗の話』、270–271 頁。
[48]濱田靑陵「東方考古學協會と東亞考古學會のこと」『民族』第 2 卷第 4 號、1927 年 5 月、133 頁。
[49]羅福成「晉寫本三國志吳志殘卷校字記」『支那學』第 3 卷第 11 號、大正 14 年（1925）8 月、82–83 頁。「李滂と白堅」には「資料 5-2」として引いておいた。

白堅はこの住宅にその後も長く居住したようで、日中戰爭末期の1945年にもまだここに居たことが知られる。東京大學の人文地理學者飯塚浩二（1906–1970）は、この年の4月17日に同仁會病院に入院していた藤枝晃（1911–1998）の紹介で白堅宅を訪れた（[資料十]）[50]。白堅は、最近北京の雙塔寺の近くから發見されたモンゴル時代の石碑拓本を飯塚に示し、そこに「大蒙古國燕京何々」とあることから、チンギス汗の建てた國の國號が初めから元だったのではなかったことを說き聞かせたという。雙塔寺とは西城區にあった金末開基の古刹慶壽寺のことで、塔は一基が七層、もう一基が九層、ともに寺の西側にあったという。しかし長安街の建設のため今は取り壞されて存在しない。老年に至っても變わらない考證癖は、やはり白堅の一面をよく傳えている。「重光さんに面識がある」という重光とは、終戰時の外務大臣重光葵（1887–1957）のことである。1942年に南京で發見された玄奘三藏の遺骨を、日本軍から當時の南京政府に移管するための移交儀式が1943年2月23日に南京で行われたが、その時重光は日本側の代表であり、白堅もその式典に出席していたのである[51]。白堅は飯塚にそのことを語ったのであろう。



1945年の白堅

結語

以上は白堅についての新しい知見の簡單な紹介である。白堅は職業柄多くの人物と交際があり、それだけ殘された情報量も多い。資料探索の條件的制約もあり、小文では日本人による記錄を主として紹介するに止まったが、博搜すれば中國國內における行動の記錄も更に明らかになるであろう。とはいえ、ここに擧げた材料だけをとってみても、前稿執筆時に比較すれば、この人物の輪廓はやや明瞭を加えたのではないかと思う。條件が許せば、更に搜索を繼續したいと思う。

[50]飯塚浩二「戰爭末期の蒙疆」『東洋文化研究所紀要』第35册、1965年3月、93–204頁。のち『飯塚浩二著作集』第10卷（133–232頁）に收めたものはかなり構成を異にするが、［資料十］としては後者を改訂稿とみなしこちらを採用した。但し白堅の寫眞は前者にしかないので、ここにはそれを轉載した。

[51]拙文「李滂と白堅」、15頁。

白堅略年譜（改訂增補）

この年譜は前稿「李滂と白堅」に附錄したものに增補を加えたものである。若干の訂正を加えるとともに、不穩當な箇所を削除した。

年　月	出　來　事
1883 年	出生（四川西充の人）
1910 年 7 月	神田錦町の錦輝館で開催の中國留學生臨時大會で革命派のために毆打される。
1911 年 9 月	四川代表として廣東で鐵道國有化に反對し、廣東保路同志會結成を成功に導く。
1911 年～12 年	成都で謝无量と交遊。
1913 年 10 月	袁世凱の大總統就任を祝い、進歩黨東京支部長として式典を主催する。
1920 年夏秋	ワシントン會議に際して國民外交大會の開催を建議。
1921 年 1 月	かつての師である市河三陽を見舞い、倪文正眞蹟と宋搨十七帖を贈る。
1922 年 12 月	王樹枏所藏の吐魯番出古寫經を田中文求堂を通じて中村不折に賣却。
1924 年 8 月	完顏景賢より唐寫本『說文』殘卷を入手。
1924 年 11 月	王樹枏より吐魯番出土三國志殘卷を購入、景印本を作成し跋を書く。跋はまた『支那學』誌にも公刊。
1925 年 8 月	「晉寫本三國志吳志殘卷校字記」を『支那學』に發表。
1925 年 12 月	唐寫本『說文』を割愛することを內藤湖南に約束す。
1925、6 年頃	會津八一に三體石經拓本の賣却を試みる。
1926 年 5 月	唐寫本『說文』に跋を付し、湖南へ讓渡した顚末を記す。
1926 年 6 月	後藤朝太郎ほか數名が北京東華門街の白堅宅を訪問。白堅は所藏品を披露する。
1926 年 7 月	淺井竹五郎と船上で出會い、蘇州でも再會する。
1928 年	北京において開催の「中日古硯會」に出品。
1928 年	この年、梁素文の吐魯番寫本の多數を購入。
1929 年 8 月	陶祖光から熹平石經原石を入手、10 月 3 日に至り內藤湖南にそのことを報ず。
1929 年 9 月	傅增湘とともに日本に來る。
1930 年	『漢石經殘石集』を刊行。『景眞本東坡潁州祷雨詩話』一卷附考證一卷を上梓。
1930 年 11 月	京都詩仙堂における樂群社雅會に參加、詩を賦す。東坡の「潁州禱雨詩話」を持參。
1930 年 12 月	陳乃乾が編輯出版した『觀堂遺墨』に題簽を書く。

1932 年某月	中村不折に熹平石經の拓本 15 枚を 32 圓で賣却。のち 1942 年には 13 個の原石そのものも讓渡する。
1933 年 1 月	『鄭孝胥日記』に白堅の名初見、以後しばしば見える。
1933 年 2 月	鄭孝胥に「張龍公詩話」（潁州禱雨詩話）卷子の題簽を求める。
1935 年 7 月〜9 月	來日し李滂の母横溝氏を捜索。京都で羽田亨と李家の敦煌寫本讓渡につき折衝。
1935 年 8 月	「耕織圖」、「貫休羅漢圖」など名畫數點を持って正木直彦を訪問。
1936 年 9 月	『魏正始三體石經五碑殘石記』を上海で刋行。
1936 年 11 月	大阪の古美術商竹石山房淺野梅吉より魏三體石經殘石 2 個を購入し、「獲正始三體石經尙書第廿一春秋第八殘石記」を『支那學』に發表。
1937 年 11 月	鄭孝胥に東坡「與孫莘老竹石畫卷」（瀟湘竹石圖）の題簽を求める。
1939 年	『讀正氣歌圖史集』を師範學院の講義錄として刋行。
1940 年 1 月	傅增湘を社長として結成された雅言社に參加、『雅言』雜誌を刋行。
1943 年 2 月	南京で玄奘三藏遺骨移交式典に出席。
1943 年 10 月	華北民衆團體反共大同盟委員長として「正義日本の往事に立還れ」の談話を發表。
1945 年 4 月	藤枝晃の紹介で、飯塚浩二が北京の白堅宅を訪問、白堅からモンゴル時代の石刻拓本を見せられる。
1955 年	曹寅舊藏の“脂硯”を張白駒に賣却。
1961 年 5 月	蘇東坡「瀟湘竹石圖」を北京和平畫店を通じて鄧拓に賣却。

資料

［資料一］錦輝館の大活劇

▽淸國留學生の混戰

▽會場忽ち修羅の巷　在京淸國留學生二百七十餘名は一昨午後一時より神田錦町の錦輝館に於て中國留學生臨時特別大會なる名義の下に一大會合を爲したるが當日會合の趣旨は淸國刻下の大問題として喧傳せらるる粵漢鐵道布設問題、國會速開案、新任淸國全權公使汪大燮排斥、留學生會館維持問題等の諸件を議するにあり。

▲議論沸騰　前述の各問題に關し意見を有する者は何れも演壇上に立ちて之を披瀝する事となしたれば、催主于振宗の會旨演說に次で二三の留學生は交々壇上に起ち粵漢鐵道布設問題に關し外債を仰がざる範圍內に於ては鐵道布設の必要を認むと論じたる後、牛込區下戸塚町六百廿六市川方止宿早稻田大學卒業の留學生にして目下北京の新聞記者として滯在中の白堅（二十七）が登壇し鐵道布設の必要は無論なるも同時に國會の必要を認むと論じたるが、白は元來吃音にて演說の趣旨明晰ならず、爲に會衆は四方より冷罵を發し喧々囂々終に白は其抱負を述べ得ずして壇を下るの已むなきに至れり。

▲殺氣場に滿つ　于振宗は會場整理のため直に登壇し各辯士の演說に妨害を與へぬ程度に贊否の意を表されたしと述べ壇を降るや突然場內は總立ちとなり白と于振宗を包圍すると見るや、鐵拳飛び、灰吹躍り、ステッキ舞ひ、場內は恰も大混戰の光景を呈し、間もなく白は前額面に血を浴て救ひを求めたれば場內取締の二名の正服巡査は直に白を保護して場外に連れ出さんとしたるに淋漓たる鮮血は迸りて巡査の白服に滴り殺氣は場の內外に滿てり。于振宗は全身を亂打されたるも血を見

るまでに至らざりしより會衆の中を潛りぬけて場外に飛び出し腦病院に入院すべく友人に傳へて何處へか逃げ去りしが、此の報神田署に達するや警部巡査三十餘名直に急行し專ら鎭撫に從事し他方には加害者の檢擧に着手せしに、多數自派の學生等は巡査の職務を妨害する者もあり、終に嫌疑者として牛込區市ヶ谷谷町七十四淸國留學生黃角鷗（二十五）、小石川區茗荷谷町四十六同留學生金振聲（三十）外十三名を神田署に拘引し目下取調中なり。

▲活劇の原因　當日會合せし留學生中には章太炎炳麟などの革命黨員の末派と立憲黨竝に常春元居正などの無所屬派の分子も加はり互に相反目する團體の會合なれば何事かの起るべしと豫想され居たるが、其大部分は鐵道布設問題は外債を募らざる範圍に於て必要と認め國會の開設は速成を要せずといふ一致し居たり。然るに數日前南京より來れる淸國諮政院の一員羅某氏は國會速成に關する意見を齎し來り、當日の會合を利用し在京留學生の贊同を得んため催主于振宗に內意を示し國會案を議題として出すに至れりと噂ありし折柄、白が鐵道と國會は現代の國家經營上離る可からざるものなりとの意を述ぶるに及び早くも會員の大部分は于振宗等と何等かの氣脈の通じ居るものと卽斷し終に斯る大混亂を釀すに至りしものなり。白は羅某等と何等の關係を有せず、純然たる自國思ひの精神より出でし辭柄の一端が大部分の會衆に誤解され終に此處に至りしものなりといふ。

（『東京朝日新聞』1910 年 7 月 5 日朝刊）

［資料二］白堅前後之血

【大陸春秋】◎白堅前後之血

▲川路代表白堅在粵演說以刀割指熱血淋漓嗚呼心哉白堅也。

▲雖然白堅者何人歟？ 前在東京錦輝館附會保皇演說國會，學界大憤羣起毆之頭破血汚，經旬乃瘥，曾幾何時而又有今日之血，嗚呼爲白堅之血者亦未免太苦矣。

▲夫白堅前日之血冷血也，今日之血熱血也。前之血可鄙，今之血可敬，同爲一身之血，何冷熱頓異若此。嗚呼我知之矣。冷血不去熱血不生，是皆錦輝館一擊之力也，誰謂老拳不足以資敎訓乎。

（『民立報』第 324 號、陽曆 1911 年 9 月 6 日、辛亥年 7 月 14 日）

［資料三］支那人の祝賀會

▽公使館の祝宴

▽嬉し泣きの演說　支那公使館及支那進步黨東京支部にては盛んな大總統親任祝賀會を昨十日午前午後に亙り擧行せり。公使館構內多數の樹木には

▲舊式な南瓜形　の大燈籠及び小形の酸漿提燈など幾百となく吊るし中空に翻る支那國旗も今日は勢いよく見えたり。館員は孰れも燕尾服又はフロックコートにシルクハットの大ハイカラにて晴れの日の應接に忙殺され朝より各國大公使の馬車、自動車にて祝賀に來る者相踵ぎて我松井外務次官、阪谷市長、井上正金銀行頭取、中野東京商業會議所會頭など朝野の名士引きも切らず館の內外は久々にての大景氣なりき。斯て夜に入るや

▲盛なる大祝宴　と早變りして外賓五十名に館員を加へ都合百餘名の大祝賀會を催し例の樹木の燈籠一時に點火して當夜の賑ひに奇觀を添へたり。次に神田錦町の支那進步黨東京支部に於ては二階の大廣間へ縱橫に萬國旗を蜘蛛手に張り渡してあり一團の樂隊は恰も凱旋將軍を迎ふる如く頻りに奏樂す。軈て支部長白堅氏の司會にて各員祝辭を述べ萬歲を三唱し更に五分演說を始め嬉しさ餘って泣き乍ら大演說を試むる者あり盛に氣焰を吐きて後一同記念撮影をなして散會したり。

（『東京朝日新聞』1913 年 10 月 11 日朝刊）

［資料四］

去年秋冬の間予大に病む、看護の婦を僱ふこと一月、そが去れる後妻は老母と幼女とをひかへ一婢を助手として病夫を看て冬に入れり、辛勤察すべきものあり、愚歌三首あれどもさのみはとて省く。

支那四川の白堅東遊して我病を訪ひ携へたる倪文正眞蹟と宋搨十七帖とを留めて予を慰む。

書聖の書　忠烈の筆　是を觀ば

君がいたつき　とみに癒ゆべし

白堅はむかし予が教へたるものなり、頗る個中の消息を解す、このたびは與謝野晶子平塚明子等にあへりといふ、話のついで予か生計を訊ふ。

君まづし　故にやすしと　唐人の
うちほゝえみて　いふぞおかしき

（市河三陽「年頭の感想」下：去冬の收獲、『上毛及上毛人』第 47 號、1921 年 1 月、6 頁。）

［資料五］

四、五年前、本當の石の破片が河南省洛陽の漢時の大學の舊趾から發見され、その蒐集家の白堅といふ人が造った拓本十五枚をもって來たものがあって、しかも價は三十二圓でよいと云ふから早速買取った。…（中略）…其內に白堅先生は都合上、その收藏の原石を李鴻章の孫の李國松の處へ質に入れた。李氏はこの春來朝の際、五尺からの石を持って來たので、之を觀ると何うもいけない。その時話の序に白堅の手元にまだ石を十三枚持ってゐるがアレは賣らないという。その十三枚はいろいろ研究すると如何にも立派なもので、欲くて堪らないから、段々交渉の末、漸く賣ることとなり、その十三枚の破片は終に僕の所有に歸し、此に初めて漢代石經の面目が分った。

（中村不折「漢の喜平石經」『茶わん』第 7 卷第 7 號、1937 年 7 月、29 頁。）

［資料六］

支那の學者で白堅といふ人が、石經の拓本十五枚を持って日本に來朝した。この白堅の齎した拓本といふのは、今から約十年前洛陽から發掘された石經の內、彼の手に歸した十三石の石刷であった。…（中略）…而してこの石の內十三石を陽光から白堅に贈られ、前述の如くその拓本を白堅が日本に齎したのであって、之が石經拓本の我が國に傳來した嚆矢である。…（中略）…さうかうしてゐる間に、石經所有者の白堅が李鴻章の孫に當る李國松に石經を擔保として金を借用したので、石經は國松の許に保管されることになった。その後李國松が日本に來たので、會見の際自然石經の話も出て、讓って貰ふわけには行かぬかと話を持ち出して見たが、あれは今自分の所有になってゐるがどうもお讓りすることは難しいといふやうなことで其時は別れた。然し其後仲介者があって、白堅の十三石は全部自分の手に入ることになった。

（中村不折「石經の話」『大日』第 188 號、1938 年 12 月、42、44 頁。）

［資料七］

漢の時代に建てられた西嶽崋山廟の碑は、實物は今は無くなって了ってゐるのであるが、明時代に取った拓本が一二枚今日迄遺って居る。これなどは唯拓本による存在である。この西嶽崋山廟の拓本を二三年前に或る支那人が日本へ賣りに來たことがあるが、なんでも一枚三萬五千圓といふ値段であった。其時に魏の三體石經の拓本も持って來た。此石經は遠からぬ昔に土中から掘り出したものであるが、後に間もなく碎けて仕舞った。そこで碎けないさきの拓本であるといふので一枚二千圓と號して居た。

（會津八一「拓本の話」『會津八一全集』第十一卷、1982 年 10 月、東京：中央公論社、404 頁。）

［資料八・一］

支那に行ったらその悠々たる大陸氣分を思ふさま味はう、この海の姿に洗はれた私の心を、五千年の古い文明の大國空氣で、更に私の煤にまみれた腦髓を清めようとそんな空想に耽って、私は船中へ持って來た「老子講話」を、この絶好の機會に、支那海のまん中で讀むことにしました。…（中略）…突然、私の肩をたたいて、「熱心にお讀みですな」と話しかけた、白リンネルの背廣服の、四十左右の端然たる白皙長身の美丈夫が、「老子は珍しい、船の中ではよい思いつきです。しかし、私は、莊子の方が好きで、今晩ゆっくり讀まうと思って居ました。あまり同じ樣な本をお讀みでしたから、一寸……」

北京の骨董商人白堅氏と、あとで名刺を交換して知った名であったが、中々流暢な日本語で、その柔和な中に一脈水の如き光を有する眼尖は、私に、商人に身を化して上海へ來往する北京の大官

か、政界の影人形といふやうな直覺を與へたのでした。
「莊子は、前から讀みたいと思って居ますが、」
「老子は玄を說きますが、莊子は眞を說きます。中々面白いですよ」
とポケットから、唐紙を綴った奥床しい木版本を取出して見せてくれた。
「北溟有魚其名爲鯀。鯀之大不知其幾千里。化而爲鳥。其名爲鵬。」
その逍遙遊第一篇に、例の人を喰った文句が、開卷第一に目に入る。
「私は骨董屋です。陶器や銅器は知りませぬが、書畫の商賣で上海から南京へ參ります。もし鐵道と戰爭の都合がよくば、漢口に出て、汽車で北京へかへりたいと思って居ます。お互に商賣人ですよ」
と白堅氏は、莊子の講義の間に飄々風に御する樣な商賣人風を吹かして、私の質問を避ける。私の疑は先づその風采の、商人にしてはあまりに端麗なると、如何にも學問の深さを示す莊子の說き振りと、それから、もう一つ、あの肩書を列ね、雅號を書き、出身地を大書する支那人流の名刺に似ず、ただ明朝體に「白堅」とのみ、二字だけが印刷された、あまりに簡素な謎の樣なその名刺に、一層疑惑の深きを覺えたのでした。
　支那海の夜の波枕に、私の空想は果しなく續いて、晝間の白堅氏が道服の莊子になり、大きな鯤となり、數千里の翼を有する大鵬になって、夢はまだ見ぬ大陸の國の神祕へ、深く深く續いて行きました。（大正一五、七、二六）
（芳野町人『呂宋の壺』「前篇三四 老子と莊子と」、東京：中西書房、1929 年 6 月、118–120 頁。）

［資料八・二］
私たちの夕食は、閶門外馬路の宴月樓で、蘇州の人たちに招かれて居る筈で、萬事先方まかせに從順に從って居ればよい私は、この賬房の安樂椅子で、黃包車の數の揃ふのを待って居ると、
「ヤー、また會ひましたね」
と、聞覺えの癖のある日本語で、不意に後から、私の肩を叩いた人があった。
「オー、これは珍しい、僕は先刻ついたばかり、あなたは？」
「昨日來たんです。明日の朝は、南京へ出ようと思ってゐます。洪水も戰爭も、大した事はない樣ですから」
　長崎から上海丸のサロンで心安くなった、白いリンネルの背廣を着た、四十四五の上品な支那紳士で、訛はあるが中々上手に日本語を話す、北京の骨董商人で白堅と名乘った人物で、いくらか白いのが混った短い頭髪の柔和な物腰の人であるが、ただその炯々と光る眼光だけが、何となくただの商人でなくて、軍閥の影に活動する游偵といふやうな感じのする人であった。
「ここで偶然お目にかかるとは思ひませなんだ。やはり南京から漢口の方へ出て、北京へお歸りになるんですか」
「あっちの戰爭と汽車の都合ですが、南京には一週間もゐるつもりです。南京へお遊びにおいでですか」
「まだ豫定はないんですが、行ったらまたどっかで會へるかもしれませんな。こんな調子なら、ハハハ」
　その人も調子よく笑って、丁度車が來たといふ報せに、しかと手を握ってわたしはこの室を出た。…（下略）…（芳野町人同上書「附錄 江南風流記 四」、“蘇州に入る夜”、617–618 頁。）

［資料九］
東單から東華門外は程近い、馬車に分乘すると間もなく白大人邸の門前に到了。「白堅」の門表も鮮やかに讀まれる。いかにも北京の讀書人の邸宅らしい落ちついた氣分がしてゐる。門に俗客なく古人の書を讀む主人の趣が偲ばれる。門を這入って客廳に行く間の舗石路、長からずと雖も一院子の周圍の設備も先づ大體そろってゐる。……やがて向かって左方なる簡單ではあったが淸楚なる客廳に通されここに茶なども請ぜられた。次で白堅大人の案內で自身の書齋に一同通される。

拜觀するものは色々ある。
　一、古玩出品の數々、文具類に古鏡類など。
　二、三國志の原文（石版刷にして一同に頒布されたり。）
　三、西域吐爾蕃の古文書類。敦煌出土經卷。
　四、出土品唐尺。
など次から次へと主人は謙遜の態度に說明の勞をとられてゐた。
（後藤朝太郎『支那風俗の話』、大阪屋號書店、1927 年 9 月、276–277 頁）

［資料十］
四月十七日
午後楠氏に案內してもらって、南池子の白堅氏を訪問。昨日、同仁會病院に藤枝君を見舞ったとき、たまたま同君の下で事務を手傳っている白堅氏令孃――同君の說によれば北京の典型的な小姐、ただしあとで仁井田君に聞いたところでは白氏は西戎の出である（著者按：白堅の出身地西充を間違えたか）――が見舞いにみえたのを機會に、そうそう白さんのお父さんにお會いなさいとて紹介の勞をとってくれたもの。早稻田大學の出身、その後も時々日本にゆき、重光さんなどに面識があるらしい。東京の空襲の報を聞いて、もし旅行さえ簡單に許されるのなら是非知人を見舞いたいと思います、といったような挨拶から始まって、…（中略）…そんな話から、元の國號の話になって、白堅先生は見事な石碑の拓本を持ち出してきた。チンギス汗の建てた國を人々は初めから元と稱してきたように思い、支那の歷史の本でもそのように敎えているけれども、これは恥ずかしい間違いでチンギス汗元年から六六年間、世祖の八年に至るまでは國號を大蒙古國と稱してきました。この拓本は北京の雙塔寺の傍らの骨董品店の裏庭に半ば土に埋もれていた石碑からとったものですが、この通り第一行に大蒙古國燕京何々寺とちゃんと彫ってあります。私が去年偶然これを發見したのですが店の裏の厠のそばでおまけに石炭置場にされていたため碑の面がこのように損傷していますが、今はすっかり土臺まで土を掘り下げて、とにかく保存の方法だけはつけました。
（『飯塚浩二著作集』第 10 卷、東京：平凡社、1976 年 6 月、230–231 頁）

（作者は復旦大學歷史學系特聘敎授、京都大學名譽敎授）